

「カルト問題から考えるキリスト教社会倫理の課題」研究会

「韓日祝福」の女性たち

—なぜ合同結婚式で結婚し、韓国での生活を続けていけるのか—

中西 尋子

1 はじめに

統一教会（世界平和統一家庭連合、旧世界基督教統一神霊協会）¹は信者が集団で結婚式をあげる「合同結婚式」で知られる。1992年8月25日にソウルのオリンピックメインスタジアムで行われた挙式には、芸能人の桜田淳子や新体操の元オリンピック選手だった山崎浩子が参加を表明したことによりテレビや雑誌では過熱した報道が続いた。

有名人に関しては参加表明から挙式後の動向に至るまで注目を集めたが、参加者の大半を占めた一般の信者に関心に向け、彼／彼女らに思いを致す人はどれだけいたのだろうか。筆者もそうだった。当時は芸能ネタとして報道にふれるだけで、それ以上考えることはなかった。しかし韓国 A 郡の農村を訪れたとき、赤ちゃんを抱いた日本人女性に出会った。驚いて聞いてみると合同結婚式で結婚し、嫁いできたと教えてくれた。A 郡にはこの女性のほかに 30 人ほどの「韓日祝福」の女性が暮らしていた。

本稿ではなぜ日本人女性が統一教会に入信し、合同結婚式で教団が決めた相手と結婚し、韓国での生活を続けていけるのかについて筆者がこれまで調査し、明らかにしたところから述べたい²。

本稿で用いるデータは 2001～2007 年頃にかけて韓国で行った聞き取り調査のものである。調査は農村部の A 郡、ソウル近郊の B 市、ソウル中心部の C 教会で行ったが、データは A 郡のものが中心である。最初に調査を始めた場所が A 郡であり、B 市や C 教会の信者よりも長く関係を維持し、聞き取り調査ができたためである。

なお本稿の記述において統一教会に肯定的と受け取れる部分があったとしても教団の是非を問うものではない。

2 統一教会について

(1) キリスト教系の新宗教

統一教会は1954年に文鮮明(1920-2012)によってキリスト教改革運動として始められた。韓国は1945年に日本による植民地支配から解放されたものの1950年に朝鮮戦争が勃発した。1953年に休戦になったが、社会の混乱、貧困、生活不安、既成教会への不満などを背景にこの時期、いくつもの新たな宗教運動が興った。金百文による耶蘇教イスラエル修道院、朴泰善の伝道館、羅雲夢の龍門山祈祷院などであり、統一教会もそのうちの一つだった〔韓国基督教歴史学会編2009:71〕。

教団設立の翌年1955年には「梨花女子大事件」が起こった。『朝鮮日報』は「梨大で除籍沙汰 邪教徒だと教授学生17名処分」(1955年5月16日)と報じた。記事によれば卒業年次生5名を含む12名の学生が除名処分になり、教授5名が罷免された。当時200名ほどの信徒がおり、大部分が梨花女子大学と延世大学の学生だったようである。いずれもキリスト教系の大学であり、その大学の関係者が異端とされる宗教団体に入信していたということで当時、耳目を集めた事件だった。

日本宣教は1958年に崔奉春(日本名:西川勝、当時33歳)が派遣されたことに始まる。1964年に宗教法人の認証を得るが、1967年には「親泣かせの『原理運動』学生間にひろがる学業放棄や家出」(『朝日新聞』1967年7月7日)と報じられた。

教祖の文鮮明は平安北道定州郡に生まれた。10歳くらいのときに家族全員がクリスチャンになった〔歴史編纂委員会2000:107-109〕。定州はクリスチャンが非常に多い地域であり、「当時、約2万余の信徒を擁していたといわれるが、これは、その人口のほとんどすべてを網羅した、莫大な数の比率」だった〔閔庚培1981:204〕。

文鮮明が教え年16歳の復活節の朝、祈っているとイエスが現れ、人類救済の使命を託されたとされる。1941年、早稲田大学附属早稲田高等工学校に入学、在学中は反日独立運動を組織し、地下活動を行い、1943年に帰国した〔前掲書:91-95〕。

1920年生まれの子鮮明は日本による植民地支配下で生まれ、1945年には25歳である。日本による植民地支配を身をもって体験しており、それが日本における統一教会の活動のあり方に影響を及ぼしているとも考えられる。

(2) 統一教会の教え

教典『原理講論』(初版は1966年、韓国)は聖書を独自に解釈したものである。エバがアダムと夫婦になる前に蛇(墮天使ルーシエル、サタンの隠喩)にそそのかされ、善悪を知る木の実を食べたという聖書の記述を蛇とエバが霊的に性関係をもったと統一教会は解釈する。エバはその後アダムと夫婦になり、人類にはサ

タンの血統が受け継がれたとされる。そのためこの世はサタンの支配にあり、戦争があったり、人が憎しみの心を持ったりするのは人類がサタンの血統をもつためだと統一教会は教える。

統一教会がめざすところはサタンの支配にあるこの世に神の支配を回復し、理想世界「地上天国」を実現することである。これが「復帰摂理」であり、必要とされるのが「血統転換」である。人類に受け継がれたサタンの血統を神の血統へと変えるものであり、合同結婚式は血統転換を象徴的に行うものといえる。合同結婚式で結婚することによって男女は原罪を清算し、生まれる子どもは無原罪の「神の子」とされる。子々孫々「神の子」が増えることにより、「地上天国」が実現されるという。

統一教会ではイエスは十字架にかけられて死ぬのではなく、結婚して子孫を残すべきだったと教える。イエスは神の血統をもっており、子どもがいたらイエスの子孫が増え続けて「地上天国」が実現されていたはずと考えるからである。そのため統一教会ではイエスの十字架の死は人類救済上の「失敗」だったと説く。前述のようにイエスから人類救済の使命を託された文鮮明は「再臨のメシヤ」であり、神の血統を持つとされるのはそのためである。

(3) 統一教会における結婚

統一教会では結婚のことを「祝福」という。結婚式は「祝福式」であり合同結婚式は通称である。統一教会の信者にとって結婚は信仰上、必須のものである。

恋愛結婚は「自分の欲望を中心にした」墮落した結婚であるとして否定される[世界基督教統一神霊協会 1990: 124-132]。エバがアダムと夫婦になる前に蛇にそのかされ関係をもったと考えることから自分の意思で相手を選ぶことは良しとされない。そのため結婚相手は教団によって決められる。文鮮明存命中は彼が男女7代前の先祖まで遡って相性をみたという。日本人同士の結婚とは限らず、国際結婚もある。むしろ同じ国や民族同士の結婚よりも国際結婚に価値がおかれる。「全世界の民族と人種が一つになる、一番の近道は国際結婚です。違った人種の男女が夫婦となって、愛の関係を築いて一つになるときに、世界ははじめて一つになります」と説き、国際結婚で築かれた家庭は「どんな家庭よりも偉大な家庭」とされる[前掲書: 120-123]。「特に、歴史的に怨讐の関係にあった民族、国家、人種や文化圏であるほどに理想的相対なのです。なぜなら、その二人が夫婦の愛の関係を結ぶことによって、一気に怨讐圏を超えていくことができるからです」と説く[前

掲書：122-123頁]。そのため日韓のカップルはもっとも理想的とされる。

合同結婚式は1960年の3組から始まり、以後途切れることなく現在まで続けられている。韓日（日韓）の国際結婚が本格化したのは1988年の「6500双」³からであり、このとき韓国人男性と日本人女性のカップルが1526組、日本人男性と韓国人女性1060組が参加した⁴。これに続く1992年（3万双）、1995年（36万双）でさらに多くの韓日カップルが生まれた。

（4）日本と韓国で異なる教団のあり方

2022年の安倍元首相銃撃事件をきっかけに統一教会の実態が次々と明るみに出てきた。しかし統一教会問題は今に始まったことではない。先述のように『朝日新聞』が1967年に「親泣かせの『原理運動』」と報じ、1980年代には統一教会とのかかわりが指摘される「靈感商法」が社会問題化した。1987年には札幌で元信者による「青春を返せ訴訟」が起こされ、各地で同様の提訴が続いた。統一教会と自民党議員とのかかわりについても鈴木エイト氏が以前から追いかけてきた問題だった。

1992年の合同結婚式に関してはマスコミが大きく報道したが、それ以降は2012年に文鮮明が死去したことが若干報じられた程度だった。長く統一教会問題にかかわってきた弁護士やジャーナリストは1992年から2022年の30年間を「空白の30年」と表現した。報道が途絶え、世間の記憶から統一教会は消えたが、この間にも統一教会は日本で活発に活動を続け、統一教会問題は続いてきた。

日本では統一教会が社会問題化し続けるのに対して韓国ではそのような問題が見られない。教団設立当初に「梨花女子大事件」があり、今でも「異端」、「似而非宗教」（偽宗教）としてクリスチャンは統一教会を嫌っているが、一般の韓国人は数あるキリスト教系新宗教の一つ、もしくは多様な事業・団体を展開する企業体（小財閥）の宗教部門という程度にとらえている。実際に韓国には統一教会関連の企業や団体、学校が数多くある。比較的良好に知られるものとしては次のようなものがある。一和（高麗人参のお茶や濃縮液、清涼飲料など製造・販売）、一信石材（大理石の壺などを製造）、世一旅行社、龍平リゾート（「冬ソナ」のロケ地でもある）、世界日報社（新聞社）、ユニバーサルバレエ団、リトルエンジェルズ（少女歌舞団）、鮮文大学校、仙和芸術中等高等学校など。

日本では正体を隠した組織的勧誘、靈感商法、高額献金などが問題になっているが、韓国ではそれらの問題が見られない⁵。靈感商法が行われているのは日本だ

けであり、サラ金で借金してでも献金するのも日本人だけである。もし韓国に日本にあるような統一教会問題があったとしたら後述するように結婚相手に恵まれない韓国人男性やその親が統一教会に結婚相手を紹介してもらおうとはならないはずである⁶。

4 「韓日祝福」が成り立つ社会的背景

(1) 男性の結婚難

韓国人男性と日本人女性の結婚を「韓日祝福」という。韓日祝福により渡韓した日本人女性信者は6000～7000人いるとされる⁷。韓国の統一教会が在韓日本人信者を対象に発行する機関紙『本郷人』（2005年2月号）には、関係者による次のような言葉が載っている。「今、日本女性6500名をはじめとして、外国食口が、計1万1千名、韓国にいて全食口の半分を越えているそうです」⁸。この言葉によれば韓国の統一教会信者のうち日本人女性信者は4分の1以上を占めるということになる。

これだけ多数の日本人女性信者が韓国人男性と結婚し韓国に暮らす背景には男性の結婚難がある。韓国では1980年代からとくに農村男性の結婚難が社会問題化した。1981年の『朝鮮日報』（8月16日）には「農村独身男性の求婚難－農村人口の過疎化がもたらす農業の将来」という社説が載り、1989年の『東亜日報』（5月13日）には「“農村独身男性 結婚しましょう” 忠清地方 仲立ち運動」という記事が載った。記事は次のような書き出しで始まる。「農村の独身男性の結婚が難しいという事実は昨今の問題ではない。最近では困難の程度を超えて不可能に近づく」と農村の独身男性たちが相次いで自殺したり、反体制運動に乗り出すなど深刻な社会問題へと飛び火する恐れもある」。記事によれば「80年代に入って全国で結婚できず悲観自殺した農村青年は300人余りにのぼる」という。

近年、韓国では結婚しなければならないという規範意識は弱まってはきているが、韓国統計庁による「2024年社会調査」によれば、結婚を「しなくてはならない」とする回答は52.5%、「してもいいし、しなくてもいい」は41.5%である⁹。1980年代は結婚をしなければならないという規範意識は現在よりも強かったと思われる。

先述のように統一教会が国際結婚を本格化させたのは1988年からである。統一教会がこのような農村男性の結婚難に着目して韓日祝福を始めたのかどうか詳細はわからないが、6000～7000人もの日本人女性信者が韓国人男性の妻として韓国に暮らす背景に男性の結婚難という韓国の社会問題があったことは確かである。

(2) 結婚を目的にした勧誘

韓国では統一教会が結婚相手の紹介を行っていることはよく知られたことである。図1は筆者が2001年にA郡で見つけた張り紙とその訳である(電話番号と地名が記されている部分は除く)。ここに載せなかった張り紙の下のほうに「真の家庭実践運動○○委員会」(○○は地名)と書いてあるだけで「統一教」(韓国での通称)とはどこにも書いていないが、これを目にした人は統一教会によるものだとわかっている。「日本女性 真の結婚」という見出しからは、統一教会が日本人女性と韓国人男性の結婚を推し進めようとしていた意図が読み取れる。

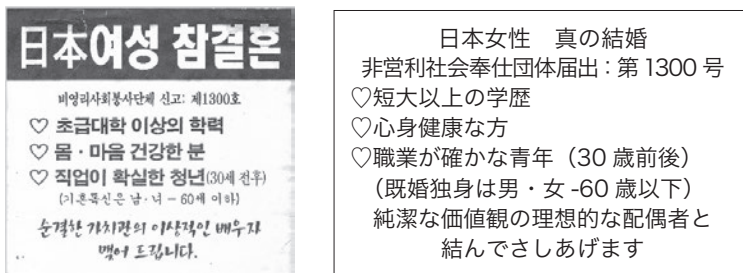


図1

韓日祝福により韓国で暮らすようになった日本人女性たちは、自分たちが結婚難にある男性のもとに嫁いできたことを自覚している。ある日本人女性信者は次のように語っていた。

「ここでは結婚を目的として伝道している。国際結婚をしませんか、で伝道。日本人女性と結婚をしませんか、で。ここにいても結婚できないし、女性も残っていない」(Nさん)。

また次のように語る女性もいた。

韓国の男性は「結婚しませんか」で(統一教会に誘われた人が多い)。主体者(夫のこと)の家は誰ひとり(統一)教会の人はいない。教会にはシオモニ(義母)が(息子の結婚のために)入った。30(歳を)こえているのに結婚しないし、(交際している)女性がいるようでもない。…だからお母さん(義母)が息子を結婚させようとして(統一教会に)通った」(Jさん)。

結婚難にある男性やその親は結婚を目的に「にわか信者」になるだけで信仰はない。とくに1992年（3万双）や1995年（36万双）はその傾向があると筆者は聞いている。またJさんは次のようにも語っていた。

シオモニは息子が結婚できたことに満足して役目は終わったと（統一）教会には来ていない。夫は教会には反対していない。仕事がなければ教会に来る。でも、積極的に一所懸命にしているわけではない。妻が喜ぶからしている程度。

結婚を目的に統一教会にかかわっただけだったことがよくわかる。

先述のように統一教会の「祝福」は教団が決めた相手との結婚である。交際したことも愛情を確認しあうこともなく夫婦になる。明治民法で規定された日本の「家制度」のもとでは、家の継承を目的として親（戸主）が相手を決める結婚が行われていた。この場合、当事者同士は愛情を確認しあうことはなかったが、人柄はもちろんとして家の格式など社会階層的につり合いがとれているかも考慮されたうえで結婚相手の選択がなされた。韓日祝福の場合、これがない。文鮮明は7代前の先祖まで遡って相性をみたというが、実際にマッチングされる相手は嫌いなタイプになると信者は教えられている。嫌いなタイプを愛せるようになることこそ本当の愛と教えるからである。

5 統計データにみる在韓日本人女性の不可解な多さ

(1) 韓国の国勢調査にみる日本人女性の人数

韓日祝福により渡韓した日本人女性6000～7000人という数は教団が実際より多めにいっているのではないかと疑いたくもなるが、韓国の国勢調査『2000人口住宅総調査報告書』（第1巻全国版3-1）を見ると、韓日祝福の日本人女性信者が相当数いるとしか思えない不可解な日本人女性の多さが確認できる¹⁰。表1は韓国在留外国人の男女別の人数である。中国は男女ほぼ同数だが、他の国々は女性より男性が多い。ところが日本人は女性が男性の1.34倍いる。

表1 在留外国人の男女別人数

	全体	男性	女性	男女比
全国	150,812	90,401	60,411	0.67
中国	25,109	12,366	12,743	1.03
中国（朝鮮族）	22,365	12,840	9,525	0.74
日本	13,398	5,715	7,683	1.34
フィリピン	12,083	6,498	5,585	0.86
アメリカ	11,940	7,390	4,550	0.62
インドネシア	10,513	8,036	2,477	0.31
台湾	8,798	4,864	3,934	0.81
ベトナム	8,725	5,093	3,632	0.71
バングラディシュ	5,137	4,916	221	0.04
タイ	4,114	2,571	1,543	0.60
パキスタン	3,250	3,071	179	0.06
カナダ	2,468	1,511	957	0.63
ネパール	1,447	1,246	201	0.16
インド	1,440	1,140	300	0.26
イギリス	1,184	866	318	0.37
フランス	1,142	741	401	0.54
ドイツ	920	655	265	0.40
オーストラリア	719	456	263	0.58
マレーシア	353	230	123	0.53
その他	15,707	10,196	5,511	0.54

統計庁 2001 『2000 人口住宅総調査報告書』（第1巻全国版 3-1）より作成。

表2は地域別在留日本人の人数である。ソウル特別市、釜山広域市、済州道は男性が多いが、その他の地域はすべて女性が男性を上回っている。全羅北道、全羅南道では女性が男性の約20倍いる。

表2 地域別在留日本人人数

	全体	男性	女性	男女比
ソウル特別市	5,599	3,047	2,552	0.84
釜山広域市	1,425	992	433	0.44
大邱広域市	204	60	144	2.40
仁川広域市	330	128	202	1.58
光州広域市	204	63	141	2.24
大田広域市	159	44	115	2.61
蔚山広域市	130	41	89	2.17
京畿道	1,602	462	1,140	2.47
江原道	363	24	339	14.13
忠清北道	290	51	239	4.69
忠清南道	722	258	464	1.80
全羅北道	411	20	391	19.55
全羅南道	497	24	473	19.71
慶尚北道	665	202	463	2.29
慶尚南道	634	212	422	1.99
済州道	163	87	76	0.87
合計	13,398	5,715	7,683	1.34

統計庁 2001 『2000 人口住宅総調査報告書』（第1巻全国版 3-1）より作成。

表3は年齢階層別在留日本人の人数である。25～29歳、30～34歳、35～39歳の年齢層の女性は男性の2～3倍いる。

表3 年齢階層別在留日本人人数

	2000年			
	全体	男性	女性	男女比
0歳	52	28	24	0.86
1～4歳	369	188	181	0.96
5～9歳	417	210	207	0.99
10～14歳	268	125	143	1.14
15～19歳	545	248	297	1.20
20～24歳	755	338	417	1.23
25～29歳	1,435	460	975	2.12
30～34歳	2,484	602	1,882	3.13
35～39歳	2,512	654	1,858	2.84
40～44歳	1,282	608	674	1.11
45～49歳	676	473	203	0.43
50～54歳	787	627	160	0.26
55～59歳	507	415	92	0.22
60～64歳	390	297	93	0.31
65～69歳	163	113	50	0.44
70～74歳	98	62	36	0.58
75歳以上	129	44	85	1.93
不明	529	223	306	1.37
合計	13,398	5,715	7,683	1.34

統計庁 2001『2000人口住宅総調査報告書』（第1巻全国版3-1）より作成。

国勢調査には統一教会と無関係の在韓日本人が含まれるが、表1～3に見るような日本人女性の不可解な多さは韓日祝福の日本人女性信者が一定数いることを表していると思われる。

(2) 日本の「海外在留邦人数調査統計」にみる日本人女性の人数

在韓日本人女性の不可解な多さは日本の統計資料でも確認できる。表4は「海外在留邦人数調査統計」平成元年版から平成20年版までをもとに作成した韓国在留日本人の職業別長期滞在者数（届け出の本人のみ、同伴家族除く）である。

表4 韓国在留日本人の職業別長期滞在者数（届け出の本人のみ、同伴家族除く）

調査年	1 民間企業関係者		2 報道関係者		3 自由業関係者		4 留学生・研究者・教師		5 政府関係者		6 その他		7 計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
1988	1,428	5	25	0	31	33	400	260	95	5	108	280	2,087	583
1989	1,483	7	26	1	9	32	756	227	101	8	131	665	2,506	940
1990	1,580	4	25	0	10	34	909	293	104	7	143	701	2,771	1,039
1991	1,650	15	27	0	6	37	921	364	117	7	184	930	2,905	1,353
1992	1,451	1	29	1	13	32	809	415	130	11	286	1,251	2,718	1,711
1993	1,398	19	28	0	16	40	1,092	442	125	14	334	2,330	2,993	2,845
1994	1,391	8	29	0	18	34	991	432	119	16	434	2,418	2,982	2,908
1995	1,723	10	28	0	12	42	1,018	473	114	18	528	2,610	3,423	3,153
1996	2,003	23	31	0	18	41	888	547	118	12	675	4,766	3,733	5,389
1997	2,190	31	34	0	18	44	969	657	108	15	721	5,343	4,040	6,090
1998	1,769	16	35	1	20	44	864	695	112	12	481	5,902	3,281	6,670
1999	1,708	24	40	0	46	47	813	804	116	11	484	6,511	3,207	7,397
2000	1,854	55	31	0	60	44	932	871	121	14	679	6,961	3,677	7,945
2001	1,831	55	40	0	127	55	1,043	1,043	124	18	388	6,796	3,553	7,967
2002	1,936	82	41	0	61	44	1,080	1,130	122	17	428	7,623	3,668	8,896
2003	2,061	95	38	1	53	47	1,119	1,226	118	22	608	7,885	3,997	9,276
2004	2,136	98	38	3	45	44	1,177	1,347	119	20	704	8,101	4,219	9,613
2005	2,376	135	40	4	50	52	1,252	1,626	116	23	842	8,435	4,676	10,275
2006	2,425	109	37	5	56	48	1,299	1,713	116	27	709	7,199	4,642	9,613
2007	2,750	113	45	4	106	56	1,267	1,655	118	24	579	6,388	4,865	10,275

外務大臣官房領事移住部政策課編『海外在留邦人数調査統計』平成元年版～平成20年版より作成。

「その他」は、1～5に属さない者。例えば、a 理髪師、美容師、看護婦、はり・灸師、コック、ひな鑑別師、大工、庭師、漁夫、ファッションモデル、その他の特殊技能者、b 工具、ホテルボーイ、ハウスマイド、給仕、掃除婦、その他の単純労働者、c 派米、派欧農業研修生、d 外国政府職員（技術協力のため政府より派遣されている者は5に分類）、e 民間団体職員（経済関係団体職員は1に分類）、f 自家営業（貿易、商業、製造、独立営業者）、g 無職、h 外国人妻、i その他上記のいずれの分類にも属さない者又は分類不能もしくは不明の者。

1「民間企業関係者」、2「報道関係者」、5「政府関係者」はいずれも男性が多数を占める。3「自由業関係者」は男女ともばらつきがあるが、多くはない。4「留学生・研究者・教師」も男女で極端な差はない。ところが6「その他」は極端に女性が多い。「その他」に分類されるものは1～5に属さないものであり、具体的にはa～iのとおりである。a～gとiに該当する日本人女性が韓国にこれだけ多数いるとは考えにくく、そうなるとh「外国人妻」にあてはまる韓日祝福の女性たちではないかと推察される。

在韓日本人女性の多さについては2005年の『産経新聞』（9月9日）にも「在韓日本人、10年で倍増 半数統一教会関係者か」という記事が見られる。それによれば「在韓日本人の数が大きく増え出したのは1990年代に入ってから」であり、「関係筋によるとその背景は、統一教会の集団結婚で韓国にきた日本女性とその子供の急増だという」。記事には「女性を中心にした統一教会関係の日本人の多

くは韓国の地方に在住」という記載もある。この点は表2「地域別在留日本人人数」で見たとおり、地方に多くの日本人女性が暮らすという点とつじつまが合う。この記事からも韓日祝福の日本人女性信者が相当数いることが確認できる。

韓日祝福を受けた女性たちはなぜ教団が決めた相手と恋愛感情もないまま結婚し、言葉や生活習慣が違う韓国で家庭を築くことができるのだろうか。

6 韓日祝福の日本女性たち

筆者が韓国で聞き取り調査をした女性たちは、多くが1988年、1992年、1995年の合同結婚式で結婚し、渡韓した女性たちだった。およそ1960年代に生まれ、1980年代に20代を過ごし、バブル経済を経験している世代といえる。統一教会の青年信者に共通するイメージとして「一様にきまじめで誠実感にあふれている」「疑うことを知らない素直な心情の持ち主」という点が指摘されるが〔塩谷1986：159-160〕、この点も韓日祝福の女性たちに共通する。

さらに次のような点がおよそ指摘できる。(1) 入信前、生きる意味を模索していたり、かたい話をするのが好きだったりしたが、周囲にはそのような話ができる相手がいなかった、(2) 社会問題や世界平和への取り組みに関心を持ち、何か自分でもできないかという思いがあった、(3) 結婚に夢や希望がなかった、(4) 自己実現を求めていた。このような点があったため、統一教会に入信し、「祝福」を受け入れたと考えられる。語りのデータから確認していきたい。

(1) 生きる意味の模索

統一教会信者の若者はみなきまじめで素直な人たちであることは自他ともに認める。統一教会問題に取り組む弁護士やキリスト者もこの点は同様である。まじめであるため今を楽しめばいいというような性格ではないことは次の語りからうかがえる。

死んだら、心は、思いはどこに行くのか。何のために生まれ、死ぬのか。この世で肉身を持って生きる意味とは。昔からずっと思っていた。人に言ったら、「あんたはバカだ、何でそんなことを考えるのか疑問だ」(と言われた)。そのために、何をやっても空しい。(Bさん)

生きる意味を模索していたが、人に相談しても相手にされず、周囲にはその思

いを共有できる人はおらず、生きていて空しさを感じる状態だったことがうかがえる。このBさんは看護師として働いていたが、看護師は「食べて行くため」であり、「人生が漠然としていた。目的がわからない。でも生きないといけないから生きていた」と語っていた。

(2) 社会問題や世界平和への取り組みへの関心

次のJさんは広島出身である。父は小学校のときに被爆しており、Jさんは被爆2世である。そのためだろうか、社会問題に関心をもっていた。

この世の男性はつまんない、話が合わない。姉も私のいうことと話が合わない。そんなこと考える人いない、そんなこと真剣に考える人いないと言われた。A郡に来てなかったら、原爆ドームの前で「核兵器反対」とかしていたかもしれない。中学の頃は部落解放研究会に入っていた。人権作文を書いて賞をもらったこともある。かたいこと考えるのが好き。原子力が問題になれば本を読んだり、平和ポスター展があれば見に行った。(Jさん)

語りからはJさんはかなり「かたいこと考えるのが好き」だったことがうかがえる。しかし「この世の男」とも姉とも話が合わなかった。この点は先のBさんと共通する。

またJさんは「ボランティア活動とか、何かの趣旨を持った団体（で活動すること）が好き」で、ボランティアセンター（統一教会とは無関係）で知的障害の子どもたちを対象にしたボランティア活動をしたこともあった。「ボランティアにはまっちゃった。おもしろかった、新鮮だった」と語っていた。この点は(3)「入信前から社会問題や世界平和への取り組みに関心をもち、何か自分でもできないかという思いがあった」という点と通じる。

(3) 結婚に夢や希望がなかった

統一教会の結婚を受け入れた背景には、そもそも結婚に夢や希望をもっていなかったという点が指摘できる。結婚に夢や希望を持っていたとしたら統一教会の結婚はとても受け入れられないだろう。聞き取り調査をしていると次のような語りが見られた。

母を見ていると、とても苦勞をしているから結婚なんてしたくなかった。理想としては永遠に変わらない間柄がよかった。永遠に変わらない間柄はないから、結婚したくない。男性は浮気するし、ずっと思い続けることは難しい。普通の結婚は（恋愛で）わーっと盛り上がり、結婚して冷めていく。時がたつと離婚も多い。ここの結婚観を聞いたら理想の結婚じゃないかなと思った。お父様（文鮮明）が決めてくれて、霊界もみな見て決めてくれるので、最初は合わなくても、いつか合うようになっている。（Kさん）

幸せな家庭とはどんな家庭か、そんな思いもあった。両親は仲が悪くて、喧嘩があった。きょうだい関係も悪くはないが、冷めている感じ。近所を見てもほとんど（仲が）いい家庭がなかった。嫁姑関係はどこでもあるし。幸せな家庭なんてどこにもない、幸せな家庭を作るにはどうしたらいいのか（と）思った。幸せな家庭にあこがれていた。これを学んでいけば幸せになれると感じた。理想の家庭とは与え合うもの。今の世は求め合う世界。（Eさん）

両者とも父母の様子から結婚願望がなかったり、「幸せな家庭なんてどこにもない」という思いをもったりしたが、Kさんは男女の7代前の先祖まで遡って相性をみるという統一教会の結婚を「理想の結婚じゃないか」と感じた。またEさんの「これを学んでいけば幸せになれると感じた」は教えにある「為に生きる」のことだろう。これは「相手のために生きる」という意味である。しばしば夫婦はお互いに相手に「もっとこうしてほしい」と思うが、それがかなわないために不満が募り、関係が悪化する。「今の世は求め合う世界」という語りは、お互いに相手に不足の思いをもち、求めてばかりいるような夫婦関係のことをさしている。相手に求めるのではなく「相手のために生きる」ことが理想の夫婦のあり方だとEさんは感じたのだろう。

(4) 自己実現を求めて

統一教会の「祝福」は本質的には結婚ではなく、統一教会がめざす理想世界「地上天国」の実現のための社会変革運動といえる。合同結婚式で結婚することで原罪を清算した夫婦となり、神の血統をもった無原罪の「神の子」を生む。「神の子」が子々孫々増えていくことで「地上天国」に近づいていく。在韓日本人信者は「特別な使命を持った天の精鋭部隊」〔武藤 1996：245〕なのである。

現実的には「地上天国」の実現は夢物語である。しかし合同結婚式で韓国人男性と結婚した女性たちにとって「神の子」を生むことはその実現へのたしかな一歩ととらえられる。また「地上天国」は国、民族、宗教が垣根を越えて一つになった平和な世界とされるが、「韓日祝福」の夫婦から生まれる子どもは生まれながらに国を越えている。韓国人男性と結婚し築いた家庭はささやかな「地上天国」と感じられるだろう。生きる意味を模索し、世界平和のために自分も何かできないかという思いを持った若者にとって統一教会のこのような教え、実践は心に響くものがあったと思われる。統一教会の信者になることは理想世界の実現をめざす運動に自らを参与させ、微力ながら貢献できることを実感させた。韓日祝福の日本人女性たちは、これこそが自己実現の道だととらえたのだろう。

教団が選んだ結婚相手の男性は社会変革運動の同志ということになる。そこに恋愛感情は必要ない。そもそも韓日祝福を受け入れた日本人女性たちは結婚に夢や希望を持っていなかったのだから恋愛結婚へのこだわりもなければ、結婚相手に対する期待もない。

結婚相手を求めて「にわか信者」になっただけの夫は本当の意味では同志にならないが、それでもかまわない。「神の子」を生むために必要なだけともいえる。次のような語りがあった。

祝福は結婚なんだけど、真のお父様の新婦の立場となること。相手の男性というのは、お父様の体。お父様から種をもらって、女性の体から子どもを生む。(Nさん)

韓日祝福の日本人女性たちはみな文鮮明の花嫁であり、夫は文鮮明の身代わりという認識である。

韓国に嫁いだ日本人女性たちはこの世に神の支配を回復するという統一教会が掲げた社会変革運動に人生をまるごと捧げたことになる。韓国での生活は楽ではない。夫が安定した職業についているとは限らず、むしろ筆者が聞き取り調査をした限りでいえば、不安定就労のほうが多かった。それでも人は意味ある苦労には耐えられる。社会変革運動に参加しているから「苦労がただの苦労で終わらない」のである。

七転び八起きで一歩ずつ。一つのこれだということを見せてもらったから、

苦勞がただの苦勞で終わらない。(Aさん)

次の語りからは韓国での暮らしについてどのように意味づけしているかがわかる。

何で戦争があるのか、どうしたら幸せになるのか、すべてがわかった。結局、幸せになれないのかと思ったが、ここにすべて答えがあるような気がした。祝福は日韓の関係。韓国は謝罪しろといい、日本は過ぎたことだという。それでは接点がない。真の愛で両方の民族が一つになるしかない。

生まれた子どもには国境がない。すばらしいことだと思う。希望、理想があつてめざして到達するものがあるから、力がわく。その一部を実践している。

愛し合ったからという結果の結婚ではない。結婚したら普通の結婚生活だが。旦那、夫という感覚の前に相対者。原理の内容があつての結婚。普通の結婚ならこんなところまでこないですよ。(Jさん)

韓国での暮らしはそれ自体が信仰実践である。生活は楽ではないが、ある意味で精神的には楽かもしれない。結婚前に日本で行ってきたような布教、経済活動からは解放され、信仰に反対する親とも距離をおける。統一教会信者であることを周囲に隠す必要もない。農村では「日本人女性＝統一教会信者」であり、農村の人々はみなわかっている。偏見の目で見ることもない。むしろ「こんな田舎に嫁いできて、よくやっている」と評価する。写真はA郡の農村にたたずむ統一教会である。違和感なく、村の風景に溶け込んでいるように見える。



写真 (筆者撮影)

7 信仰を失っても韓国に暮らす脱会者

(1) 在韓の脱会者

篤い信仰を持ち続ける信者がいる一方で自主脱会する者もいる。韓国で暮らすうちに統一教会の教えや日本と韓国での信仰のあり方の違いから疑問を持ち始め、信仰を失うのである。韓国に暮らす脱会者の数は不明である。正式な脱会手続きはせず、礼拝に行かなくなり統一教会から離れるという形のため、教団も脱会者の人数を把握できない。

韓国で築いた家庭は信仰を土台にしている。信仰の否定は結婚や築いた家庭そのものを否定することになる。離婚して子どもを連れて帰国する者ばかりとは限らず、離婚せずに韓国に住み続ける元信者もいる。韓国に生活基盤ができ、帰国しても日本で生活していけるかわからない、子どもが韓国人として育っているなどの理由からである。

調査で知り合い、現在もときどき連絡を取り合っている在韓元信者の日本人女性Sさんがいる。この女性は1988年に親の反対を押し切って韓日祝福を受けて渡韓した。信仰を失った後も離婚はせずに韓国で暮らす。実家の母親はSさんを許さず、Sさんは父親の葬儀にも参列できず、一時帰国したとき連絡をとっても母親は会ってくれなかったという。2024年12月に一時帰国し、連絡をせずに実家に行ったところ36年ぶりに母親に会えたという。

信仰を失った後も離婚せず、韓国に留まることができるのは、夫に暴力やアルコール依存などの問題がない場合である。仕事が不安定であってもまじめに働き、愛情がなくとも一緒に暮らしていける夫でなければ難しい。

(2) 春川事件

これまで見てきた事例は現役信者を対象に調査した限りにおいていえることである。調査対象になった女性たちは経済的に厳しい生活を送りながらもとりあえず平穏無事に暮らしている人々である。筆者が調査するなかで出会う女性たちは、統一教会の礼拝に出てこられる人たちだけであり、礼拝に行きたくても行けないような困難な状況にある女性には出会えないからである。統一教会で結婚したにも関わらず、妻が礼拝に行くことを快く思わない夫もいる。

平穏無事に暮らす女性たちがいる一方で悲劇的な事件も起こっている。2011年8月21日、韓国の「中央日報」(日本語版サイト)は次のような見出しで事件を報じた。「生活苦のため…日本人妻が韓国人夫を殺害=韓国・江原道」¹¹⁾。日本人妻A(52歳)が韓国人の夫P(51歳)の口をタオルで塞ぎ、窒息させて殺害した

という事件だった。記事ではAについて「95年、ある宗教団体の斡旋でPと国際結婚し、韓国で暮らし始めた」とあるだけだが、1995年の韓日祝福の女性だった。子どもはいなかった。

記事によれば、夫は結婚当時から無職であり、毎月30万ウォン（当時、約2万1000円）程度の基礎生活受給費（生活保護）で生計を維持してきたが、夫に腎不全の症状が表れてからは治療に月70万ウォンほどかかった。それでもPは酒ばかり飲み、暴れて家具をつぶすことが多かったという。警察でAは「これ以上の治療費に耐えられず、自分も生きていくのが苦しくてした」と供述したという。

事件があった江原道の春川は「韓流ブーム」のきっかけとなったテレビドラマ「冬のソナタ」（2002年）の舞台、ロケ地になった場所である。「冬ソナ」ファンが観光に訪れる陰で、このような悲劇が起こっていたと思うとやりきれない思いである。

8 おわりに

なぜ日本人女性が統一教会に入信し、教団が決めた韓国人男性と結婚し、言葉も生活習慣も違う韓国に渡り、家庭を築くことができるのかを筆者の調査からいえることを見てきた。

統一教会における結婚は結婚でありながら結婚ではない。理想世界「地上天国」実現のための社会変革運動ととらえるほうが理解しやすい。かたい話が好きで自己実現を求めるような、まじめな若者は入信することで、世界平和などについて関心をもち、ともに活動できる仲間が得られる。入信というよりも社会変革運動への参加だったといえる。しかし国、民族、宗教が垣根を越えて一つになった平和な世界とされる「地上天国」は、統一教会のもとに一つになった世界なのである。統一教会は強烈な自民族中心主義の宗教だということを忘れてはならないだろう。

韓日祝福の女性たちにとって統一教会への入信、結婚と韓国での暮らしは主観的には自己実現だったかもしれないが、それは同時に統一教会に人生を絡めとられていく道だったともいえる。

〈註〉

- 1 報道では「旧統一教会」が使われているが、本稿では「統一教会」を使用する。2015年に教団名が「世界基督教統一神霊協会」から「世界平和統一家庭連合」に改称されたが、「統一教会」は略称のため、そのまま使用する。
- 2 調査の詳細については、櫻井義秀・中西尋子『統一教会－日本宣教の戦略と韓日祝福』（北海道大学出版会、2010年）を参照。

- 3 6500 双の「双」は「組」を表す。1988 年の合同結婚式には 6500 組が参加した。合同結婚式で結婚した当事者同士で自己紹介をするときは「私は 6500 双」のようにいう。
- 4 「祝福の歴史」<https://uc802.org/blessing/blessinghistory/> (世界平和統一家庭連合八王子家庭教会)。
- 5 韓国では統一教会よりも「摂理」(キリスト教福音宣教会)や「新天地」(新天地イエス教証しの幕屋聖殿)が問題になっている。
- 6 日本では統一教会が人権や信教の自由の侵害、特定商取引法違反などで問題になるのに対して韓国ではキリスト教の異端問題の側面が強い。
- 7 日本人男性と韓国女性のカップルの日韓祝福により韓国に暮らす日本人男性信者は約 300 人である [『本郷人』2008 年 8 月号]。
- 8 「食口」は韓国語で「家族」の意味だが、統一教会では信者を意味する。
- 9 統計庁「2024 年社会調査結果」2024 年 <file:///C:/Users/korea/Downloads/2024%EB%85%84+%EC%82%AC%ED%9A%8C%EC%A1%B0%EC%82%AC+%EA%B2%B0%EA%B3%BC+%EB%B3%B4%EB%8F%84%EC%9E%90%EB%A3%8C.pdf> (韓国語)。
- 10 最新のデータではなく [『2000 年人口住宅総調査報告書』] のデータを用いるのは、その後のデータよりも在韓日本人女性の不可解な多さがはっきりと表れているためである。1988 年、1992 年、1995 年の合同結婚式で韓日祝福を受けた日本人女性信者が韓国に暮らし始めてから直近の国勢調査が 2000 年ものになる。
- 11 「生活苦のため…日本人妻が韓国入夫を殺害 = 韓国・江原道」(『中央日報』日本語版 2012 年 8 月 21 日、<https://japanese.joins.com/JArticle/157931>)。

参考文献

- ・韓国基督教歴史学会編『韓国キリスト教の歴史 3 - 解放から 20 世紀末まで -』韓国基督教歴史研究所、2009 年 (韓国語)。
- ・外務大臣官房領事移住部政策課編『海外在留邦人数調査統計』平成元年版～平成 20 年版。
- ・櫻井義秀・中西尋子『統一教会 - 日本宣教の戦略と韓日祝福 -』北海道大学出版会、2010 年。
- ・塩谷政憲「宗教運動への献身をめぐる家族からの離反」森岡清美編『近現代における「家」の変質と宗教』新地書房、1986 年、153-174 頁。
- ・世界基督教統一神霊協会『祝福の意義と価値』(40 日研修教材シリーズ No.11) 光言社、1990 年。
- ・世界平和統一家庭連合 家庭局国際部『本郷人』(教団内機関紙)。
- ・統計庁『2000 年人口住宅総調査報告書』(第 1 巻全国版 3・1) 2001 年。(韓国語)
- ・武藤将巨編『本郷人の行く道 - 韓日祝福家庭教育資料』国際家庭特別巡回師室、1996 年 (非売品)。
- ・閔庚培 1981『韓国キリスト教会史』新教出版社。
- ・歴史編纂委員会 2000『日本統一運動史 - 文鮮明先生御夫妻と日本の統一教会および統一運動の歩み -』光言社。

付記：本稿はプロジェクト「カルト問題から考えるキリスト教社会倫理の課題」研究会の第 3 回研究会 (2024 年 2 月 12 日) において「韓日祝福の女性たち - なぜ統一教会に入信し、結婚、韓国での生活を続けていけるのか -」として発表したものに加筆したものである。